

I Qの実生活における機能

© Paul Cooijmans

これはI Qの各レベルにおける特徴と実生活での機能を記述したものである。成人用I Qテストの標準偏差は15で100を平均値とするが（子供用テストでは異なる）それぞれのI Qレベルの正確なランク分けはもちろん任意的であり、実際の能力はI Qそれ自身より社会的な環境で左右される。I Qは低いレベルの知能の判定には有効であるが（G因子と高い相関関係も）知能レベルが高くなるにつれ、あまり重要でなくなる。つまり現金と同じで金持ちに成ればなるほど、現金そのものの価値が重要でなくなるのと同じように、I Qが140を越える人の場合のI Qテストの意味は未知数である。

20以下 ... 最重度知的障害

大抵のケースは身体的障害を持ち短命で常に介護を要し、学習能力も殆どなくI Qが1しかない場合は成人でも3ヶ月児の発達レベルを超えない。ちなみにI Q5は1歳児の知能レベルに相当しI Q10は2歳児と同等である。

20-34 ... 重度知的障害

言語習得など基礎的な学習が困難で、いくつかの自己管理能力の習得が可能だが同時に他者への依存が必要。一般的に運動能力も劣り就労能力もない。重度な知的障害の場合、妊娠時や幼少時における脳へのダメージが原因である場合が多く、遺伝的原因は少ない。

35-49 ... 中度知的障害

特殊訓練を施せば簡単な生活能力と就労能力の習得が可能で、特別に考慮された環境で就労できる可能性もある。ある程度の独立を達成できるかも知れないが、多くの場合は社会に適応できない。

50-69 ... 軽度知的障害

自己管理能力の習得が可能だが監督者が必要とされる。管理された環境であれば一人

暮らしが可能で、未熟だが社会的に適応できる。ほとんどの場合、明白な身体的障害がない。軽度の知的障害は重度の場合と違い脳全体のダメージが原因でなく、一部の脳機能の異常や遺伝的要素で起こりやすい。

70-79 ... 境界域

教育が可能な限界点。日常的な作業（電話張、時刻表、銀行、書類記入、ビデオや電子レンジ等の使用）が困難で親族や行政の援助を必要とする。監督者がいる単純な仕事をする事が可能。

80-89 ... 平均以下

自立的行動が起こせる最低ライン。選択肢が無く何をすることが明白な場合に限り、監督者を必要としない機械的作業を行う事ができる（組立ライン、フードサービス等）この知的水準の者は暴力的傾向があり、ほとんどの暴力犯罪はこのレベルの男性によって引き起こされる。もちろん全員がそうではないが、ある組織の平均IQがこの水準である場合、組織の多くの男性とトラブルを起こす可能性が出てくる。

90-99 ... 平均

意思決定を含んだ技能およびビジネスの習得が可能（職人、店員、警官、事務員）

100-109 ... 平均

本やテキストから学習する事ができ、上級レベルの就労能力がある。

110-119 ... 平均以上

大学教育を受ける事が可能（学士号取得者、中間職、教師、会計士）難易度の高い試験を受ける事が出来る。

120-129 ... 優秀

自分の知識を処理し推論する能力がある（修士号取得者、管理職、弁護士、化学者）

139-139 ... 最優秀

小説やエッセー記事などの文章が書けるかも知れない(博士号取得者、作家、ソフトサイエンス=社会制度など、厳密に数値化しにくい事象を対象とする学問)高度な知能にも関わらず、ほとんどの場合は社会適応力がある。この水準の上位者は高レベルの知能検査で中間スコアを得るが、一般的なIQテストではG因子との相関関係の信頼性が低くなり、正確な結果が出にくくなる。

140-149 ... 天才

理性的なコミュニケーションと学術的な仕事が可能。この水準からは特別に作成された、高レベルまで計測可能なIQテストが使用されるべき。重要な科学の発見と進歩はこのレベルより上のIQによって成されるが、同レベルの知能の団体から十分に支持されない場合、社会環境とのズレから社会不適応の問題が生じるかもしれない。このレベルのIQが従来の100を中心とした正規分布の右端に単純に位置して良いのかは不明である。高い知能の出現は非遺伝的な他の要因があるかも知れず、これは中心を100とした正規曲線への誤差を引き起こし、右端と左端(知能障害の領域。これも非遺伝的な要因がある)においても出現率の誤差を生じさせる。

150-159

調査中

160-169

調査中

170-179

調査中

180-189

このレベルの者は人類で最高の知能を有する一人かも知れない。